



関西学院と多くの友人たちに感謝

塚本 哲夫（つかもと てつお）

六甲バター株式会社代表取締役社長
1964年・商学部卒

関西学院高等部に入学したのは57年前のことでした。高校3年、大学4年の計7年間は、今の私の年齢の一割にもならないのに、思い出は心の中に鮮明に残っています。坊主頭を長髪にしたのはその頃ですが、今では頭髪も残り少なく淋しくなりました。

高等部では、男声合唱のグリーククラブに入りました。その時、自分には音楽の素質がないことは、よく分かりました。しかし、そんな私でも、今も合唱を楽しんでおります。神戸女学院高等部コーラス部との混声合唱の練習は、当時の男子学生にとって大きな楽しみでした。彼女たちとは今も「メサイヤを歌い続ける会」でステージに立っております。

ります。

大学では、将来は経営者になるんだと言う思いで商学部を選びました。課外活動は宗教総部のSCAと体育会の航空部でした。奉仕活動や、グライダーに乗って空中散歩を楽しんでいました。しかし心の中では、いつも小心者の自分を克服してもっと大きな自分になりたいと思い悩んでおりました。それで時間的、経済的に許される範囲のことは積極的に何でもチャレンジしておりました。

1ドルが360円の時代です。私にとって海外留学なんて夢の時代でした。そんな時、ライオンズクラブの交換学生プログラムを知り、参加しました。初めてのハワイ、カナダ、アメリ

カ西海岸に感動しました。帰国後、このまま社会人になるよりもアメリカの平和部隊に入りたいとジョンソン大統領に手紙を出しました。なんと数週間後に「NO」ではありましたが返事が来たのには感激しました。平和部隊の構想を日本の文部省にも問い合わせました。今では「青年海外協力隊」が設立され、若者達が世界平和のために活躍していることを嬉しく思っています。

今思えば、これと言って目立ったことのない学生時代でした。でも半世紀以上も前の関学での経験が全て今に役立っています。関西学院と、そこでの多くの友人たちに感謝です。有難う。



関学のDNAのバトンリレー

和田 勇（わだ いさみ）

積水ハウス株式会社 代表取締役会長兼 CEO
1965年・法学部卒

和歌山の自然豊かな田舎で育ったわたしにとって、関学の上ヶ原のキャンパスはとてもまぶしいものでした。落ちていたまちなみの先に、広大な中央芝生と時計台から広がる西洋式建築の学舎。少し出かければ繁華街。そして梅田へ。大学生になって背伸びした気持ちと、別世界にきた新鮮さが、ないまぜになっていたことを記憶しています。

1961年に始まった大学生活では、アルバイトや友人たちとの全国鉄道旅行に明け暮れ、読書にも没頭しました。中でも「Mastery for Service」というスクールモットーには大いに共感しました。「隣人・社会・世界に仕えるため、自らを鍛える」という精神は、自由闊達な風土

で伸び伸びと過ごした経験も含めて、その後のわたしの人生の基軸になってくれたように思います。

住宅とまちづくりの仕事に就き、多くのお客様の幸せや人生にかかわって半世紀にもなりません。今や世界にその舞台は拡がりました。積水ハウスの企業理念の根本哲学は「人間愛」。「相手の喜びを我が喜びとし、奉仕の心を以って何事も誠実に実践する」という精神は、「Mastery for Service」に通じます。いつも考えていることは「住まいを変えて、社会を変える」という広い視野です。

わたしは高度成長期、バブル期、長期のデフレ期、そして阪神淡路大震災や東日本大震災を現場で経験してきました。目まぐる

しく社会は変化し、わたしたちの生活も、想像もつかなくなつた便利さと快適さを手に入れ、人々の意識も大きく変化しました。

しかし、わが大学のキャンパスの雰囲気は、リニューアルされつつも昔と変わりません。阪神間のまちなみも、震災を経ながらも、独特のゆつたりした品のある雰囲気は変わっていません。関学の良さは、キャンパスの美しさだけでなく、関わる人や地域の人々に支えられて存在するのだと実感します。いつまでもあの独特の空気を大切にしたい。わたしたち卒業生と、これから続く若者たちが一緒にバトンを繋いでいくためまぬ努力が大切であり、またその土壌が関学にはあると思っています。